

みなまた環境まちづくり推進事業
観光と公共交通円卓会議 第4回中心市街地活性化分科会

【開催日時】2012年1月30日（月）15：35～17：15

【開催場所】水俣市役 秋葉会館3階 会議室

【参加者】参加者名簿・座席表参照

司会：鎌田係長

【会議内容】

（1）開会のあいさつ（厚地部長）

（2）議事

- これまでのおさらい（鎌田係長）
- 中心市街地の活性化に関する全国の実践事例の説明（価値総研：高尾）
- 今後の取組みに関する議論

（4）事務連絡

- 次回の中心市街地活性化分科会開催日：2月20日（月）

（5）閉会

【中心市街地活性化に向けた取組みの議論】

発言者	発言内容
原田	水俣らしさをどうするかという意見があった。水俣には地元学があるので、価値総研から提示された先進事例を勉強する方法もあるが、中心市街地の活性化策の検討にも地元学を取り込んで、無い物探しよりも、ある物探しをする「地元学商店街版」を行えばよいと思う。あるもの探しの地元学の考え方を活かした取組みとして「スイーツのまち」や、「村丸ごと博物館」などがすでにある。 「何もない商店街」という発想から、転換していけばよいのではないだろうか。いろんな意味で発想の転換をしていかなければならない。 商店街の「ひまわり」という洋品店から30年前のチラシを借りてコピーを持ってきた。(チラシのコピーを全員に配布)商店街に非常に活気のあった時代が伺える。 中心市街地に、駐車場が足りないという意見も通行料調査の中で挙がってきたが、実際に調べてみた結果、積み上げで行くと約300台分の駐車場の容量があった。 「地元学商店街版」に取り組む過程の中で、高齢者の話を聞くことも重要である。地域の人に昔の話を聞くプロセスは、話す側も昔を思い出したり、話していくうちに自信や誇りを取り戻したりと、意識が高揚していく。 合同会議で言われていた、地域のお手入れは、ある意味「割れ窓理論」のことだと思う。ジョージ・ケリングの「割れ窓理論」は、窓が壊れているのを放置すると、やがて犯罪が横行することになるため、窓が1つでも割れたら、直ぐに修理してそれを割れていない状態に戻すことが重要である事を提唱している。商店街も、一つでもシャッターがしまったら、そこから対策をしていくなどの取り組みを続けていくことが重要であると思う。 ただ、その際にはシャッターの向こう側にも注目していきたい。空き店舗問題は、店舗を空けられない事情として後継者不足、高齢化、福祉などの問題があり、これらの問題と一緒に考えていく必要がある。 例えば、商店街に「おっちゃんラーメン」という人気のラーメン店があり、1階が店舗、2階が自宅となっている。店主が高齢化しており、2階に上がることが困難なため、1階の店舗奥で寝起きしている事情があり、店を閉めたからといってすぐには次の人に貸せないようである。 商店街の後継者調査でも、半分以上の人が、「自分の代で店を閉める・後を継がせたくない」と回答した。現在の店主の多くは60代であり、あと20～30年程度は続くと考えられるため、今すぐ活性化策に取り組めば、どうにかなると思う。 「地元学商店街版」に取組み、良さの再認識をし、例えば人吉のように地域の良さを伝える案内人を配置する事も良いと思う。 ⇒(鎌田) 商店街の案内人についても今後考えていきたい。
植田	いいなと思うのが、多々あって、どれが良いかと聞かれても、ただただ、真似したい・目標としたいところがたくさんある。今この場で「これ」と決められない。取り組むのが難しいところもある。 分科会で議論した内容を、商店会へ持ち帰ったところ水俣は「環境・エコ」を全国に発信しているから、それに関連した取組みをしたいという意見が多かった。現在は、街並みの街頭さえ消えているところもある。最低限、商店街は明るくないといけないので、街灯のLED化という意見が出た。また、商店街の魅力は、個店の努力に尽きるが、協力いただけるのならば、店舗も含めた商店街全体のLED化に取り組んでいきたい。

発言者	発言内容
平田	商店街で買い物をしてくれた人にはバスの補助券を出す、これは店舗同士の話し合いさえ上手くいけばすぐできる。 市立病院とのコラボは、商店街としては非常に魅力的である。ただ、市立病院との交渉が必要となる。 「街をきれいにすることが重要である」ことから、今から7・8年くらい前から、旧交番から駅前までの間のごみを拾って歩く取り組みも行われている。しかし、自主性に任せても結局は、商店会長など一部の人の間でしか続かない。みんなで話し合って取り組んでいかなければならない。日にちを決めて、みんなで一斉にやるのが大事である。 街路灯の電気のLEDはない。あさひ町の商店街も、一月に2万8千円の電気代がかかっているのので、LEDにすると非常に良い。 ⇒（鎌田） 街の清掃については、市民を巻き込んだイベントにすることも考えられる。 今の街路灯を活かしたLEDについて、追加的に調査してみる必要がある。
上田	全国の事例はどれも面白い。全部やってみれば良い。 商店街による補助券の配布の取組みとして、みなくるバスだけでなく、タクシーに乗せる（タクシーでも使える補助券を配布する）ことも考えるのはどうかという意見もある。 コミュニティカフェとして水光社の前にあるふれあいセンターを、もう少し活用できないかなと考える。現在は、一部の人がしか集まっていないが、たとえば、住民票を取れるようにするなどすれば人も来るだろう。 商店街の活性化のためには、店舗の努力が大事だが、水俣の商店街は週末しまっている。確かに、市内の人は平日の方が利用が多いが、週末はよそから人が来ているので開けた方が良い。 ⇒（鎌田） ふれあいセンターの活用についても、今後考えていきたい。
高倉	二人（植田・植田）と同意見であり、紹介された事例を全部やってみれば良いと思う。 今、マイカップやマイタンブラーが流行っているが、例えばリグラスのマイジョッキをもってきたら、割引をするなどの取り組みをちょこちょこやっていくのも面白いと思う。 パソコンやプリンターなどをおいて、会議ができるようなコミュニティカフェを作れば、そこに人が集まる動線ができる。さらに、そこにファッション雑誌とかを置くと、雑誌を目当てに入ってきた中高生と、会議をしている大人とのふれあいも生まれる。 今の高校生がどこに立ち寄っているのか、どこで遊んでいるのかを知ることも重要だろう。商店街に学生をなじませることは、将来、彼らが我々の世代になった時のためにも必要だろう。 お母さんと子どものセット世代も、人口的に多い。たとえば、猫バスのようなものを走らせたり、母親が集まれるコミュニティカフェを作るなども良い。月浦福祉ニュータウンでよく子連れの若い母親を見かけが、月浦を離れてないのだろうか考える。彼女たちが月浦を離れて街に来られるような場所や仕掛けを作ればよいと思う。 最近、コツコツ拡大していきましょうという意味で、コツコツマルシェに取り組んでいる。マルシェの取組みは、物品の対面販売だけでなく、水俣市内に埋もれている人材を外に発信していく機会にもなっている。 ⇒（鎌田） 高校生を対象にしたアンケートについても検討したいと思う。 自分の子供たちを例に考えると、部活で忙しいが、中学生はロッキー、高校生はエムズの地下に居ることが多い。

発言者	発言内容
松橋	LED 化の話の中で、お店の中の話があったが、商店街の活性化には、通りの部分の取り組みが活性化の中では重要となる。 トランジットモールは、一時的なイベントなど、実験的にでも取り組んでいけたらよいと思う。歩きやすさの演出は、ベンチやテーブルなどの休める場所を作ることが大切である。 マルシェの開催も、医療センターだけでなく、空き店舗の前を活用する事も考えられる。 商店街は大型のショッピングモールと異なり、買い物カートなどを使って、歩き回るのに適していない。そこで、パークアンドウォークしても、車がないと大きな物などの買い物ができなかったりする。道の段差をなくしたり、徹底的に平らにするなど整備して、カートを押せるようにすれば、楽しく歩けるようになり、大きな買い物もできる。 市民ニーズの把握は重要であり、商店街は消費者のニーズを把握する場として魅力的であると考え、活性化策に取り組む際の役割分担として、行政主導でニーズ把握を行う際にも商店街や市民と一緒にニーズを聞き出すアンケート票を作成することが良い。 最近は特に過疎地において、ネットショッピングで注文したものを届けるサービスを提供しているところが多い。水光社など先行的に取り組まれているところがあれば、商店街も乗っかって一緒に宅配サービスを提供していけるとよい。独自でできなくても、他と協力して取り組めると良い。
大山	水光社で、昔はネットショップに取り組んだが失敗した。高齢者がインターネットをしない事に原因があったため、現在は、チラシや商品冊子を持って行って、電話で注文を受けるという単純明快な仕組みでやっている。 観光客が水俣に来ると、土産物を買いたいという意見が非常に多い。 「水俣」は水俣病を連想させるため、発想を変えて「美奈真太」ブランドとして売り出していけばよい。 高校生も女性も皆、飲んだり食べたりしたいと思う。食べ物とお茶を出すだけで、そこで交流が生まれる。特に若い女性を呼び込みたい。鹿児島に人がいつも集まっているお店があり、そこでは来店者に無料でコーヒーを出している。出されたコーヒーを飲むとつい何か買ってしまう。衣料品やお土産品の店でも、どんなお店であっても「お茶でもいいばいどうぞ」、さらに「お菓子も少しついてくる」などと言って何かで釣るとみんなが入れる雰囲気、外部から来られる雰囲気ができ、人が集まってくる。
川上	医療機関と商店街の連携は良いと思う。ここに挙げられている取組は、全てできるかなと思う。ぜひとも取り組みたいと思う。全面的に協力したいと思う。できるだけ医療機関を有効的に活用してもらえればと思う。 みなくるバスが中心市街地を回遊できれば良いと思う。
松岡	高齢者が大きいものを買った時に、配達してくれる制度があればよいと思っていたが、そのような取組はどうだろうか。 年末シルバーセンターの取り組みで、年末に門松の作成をしたが、そのようなことが、日常的にできるような場ができれば良いと思う。空き店舗を使って、高齢者が集まってワイワイ話し合いながら、何かを作る場ができれば良い。 テレビでよく、主婦などが集まってもの作りなどに取り組んでいるところを見る。野菜や竹など、水俣の資源を活用して、何を作って、どうしたら売れるだろうかといったものを、話し合いながら取り組める場があるとよい。消費者と生産者が話し合える場を商店街の中において、商店街を活性化させる事はできないかと考える。 ⇒（鎌田） 例えば、市が２年間程度空き店舗を借り上げてそのような場を作ることも考えていきたい。

発言者	発言内容
古木	域内の活性化には、交流人口を増やすことが必要だと思う。そして、交流人口を増やす術は観光だろう。 水俣は海が美しい中都市という印象が強いから、もっといろんな人につれてきたいと思っている。 美しい街には電柱と看板がない、と思っている。ヨーロッパではどんな小さな街も電柱の地中化に取り組んでいる。美しさとは見た目であると思う。 街に活気をもたらすターゲットとしては、若い人も重要だが、特に中高年の女性が重要であり、中高年の女性は活気を生む。
大西	結局は、誰がやるのかというところが一番のポイントとなる。一人ひとりが自分でやるのか、組合でやるのか、組合だけでなく、行政も巻き込むのか、市民や市民以外も巻き込むのか。自分でやる場合は、自分で納得すればできるが、組合でやる場合は組合を説得する必要がある。また、組合以外も巻き込む場合、行政は予算の問題がある。外の人を巻き込むのは、場合によってはそんなにハードルが高くないかもしれない。何をやるかを決め、誰を巻き込まなければならないのかを整理する必要がある。 暖簾の事例が紹介されていたが、事例の総社市と同じ岡山県に中国勝山という地域があるが、そこも暖簾で街づくりをしている（Noren art of Katsuyama）。商店だけでなく、一般の家も暖簾をかけているところがポイントである。また、統一したのれんではなく、それぞれがバラバラであり、各家で独自の暖簾をかけて特徴を出している。共通の暖簾ではなく、逆転の発想で、それぞれ違う暖簾で統一感を出すこともできる。また、街づくりとして、空き店舗や、駅も暖簾をかけている。暖簾のある駅もなかなか良い。 二番煎じにはなるが、九州ではまだ取り組んでいないので九州初になればよい。 九州ではお茶を出すことは得意ではないだろうか。水俣の場合は、お茶も地元で生産しているので、お茶とお菓子を組み合わせで出せばよいのではないか。紅茶とスイーツなども良い。洋菓子屋でお茶を出すことをきいたことがないので、やってみたら面白いと思う。 コミュニティカフェは空き店舗対策として良い。市民は必ずしもお店を求めているわけではないので、商店街の中に市民に必要な機能を取り入れる。例えば、住民票が取れる場所や、荷物の集配ステーションなど良いだろう。 すでにあるコミュニティカフェがうまくいっていないのは、市民のニーズに合っていないのかもしれない。佐賀県の事例は、宅老所のノウハウを生かしてコミュニティカフェを運営して成功している。デイサービスや介護関連、高齢者関連の方々が取り組むのも良いかもしれない。 街の街灯用の LED はある。 長野県の飯田市は、市役所が環境モデル都市として LED の導入を推進している。LED を作っているメーカーが地域内にあったため、市長がその企業の LED を持ち歩いて各地で宣伝している。飯田に問い合わせると良いかもしれない。